別紙様式

令和４年３月８日

教育長　様

校番　30　　世羅　高等学校長
（　全日制　課程）

「高等学校課題発見・解決学習推進プロジェクト」に係る
学科等の特色を生かしたカリキュラム開発研究指定校
令和３年度　実施報告書

１　学校の教育目標等

(1) 教育目標

「ＴＯＰ　ＲＵＮ　世羅」を掲げ，生徒の自主性・自律性を高めるとともに，あらゆる分野においてリーダーとなる生徒を育成する。

昨年度末に，各分掌で年度の評価を確認し，次年度に向けての課題を明らかにしていった。そこから今年度の行動計画・評価指標・目標値を定める中で，教育目標の確認を行った。その後，校務運営会議，職員会議を通じて全職員で共有化を図った。

(2) 育てたい生徒像及び学校として育成を目指す資質・能力

「なぜ？を考え抜く生徒，自己を律し，他を巻き込むことのできる生徒，世羅を思い，世羅の未来を創ろうとする生徒」が育てたい生徒像である。

世羅高校生に付けたい資質・能力は，一昨年度教職員全体で世羅高校の課題を共有し，現状を分析した上で，知識・技能，思考力・判断力・表現力，学びに向かう力・人間性等の資質・能力の３つの柱を整理し，それぞれ「つなげる」，「説明する」・「批判する」，「協働する」・「学び続ける」のキーワードでまとめ，求める力を「活用力」，「論理的思考力」，「批判的思考力」，「コミュニケーション力」，「共同参画」，「社会的貢献」，「自己理解」，「他者理解」とした。そのうえで，学校全体の学年ごとの到達目標を言語化し，それを各教科・学科等に落とし込んでいる。年度末に，各教科の教科経営計画の整理と次年度の経営計画策定と並行して検討し，教科主任会議を通じて共有化を図っている。生徒・保護者には各教科のシラバスとともに内容を配付している。

(3) 学科等の特色

農業経営科は地域営農類型と六次産業類型の２類型を展開し，地域の主幹産業である農業を通じて，地域に貢献できる生徒を育成している。生活福祉科は，生活経営類型と福祉類型の２類型を展開し，幅広い「生活」に関する知識と技能を身に付け，豊かな生活と地域に貢献できる人材を育成している。普通科は，将来活用できる幅広い教養を身に付け，それぞれの進路に則した高い学力を醸成している。また，総合的な探究の時間を通じて，授業で学んだ内容を地域・社会の諸事情とつなげて考え，高い問題意識をもち，世羅町に対して具体的な街づくりの提言を行うことで，地域社会に貢献できる生徒を育成している。

２　研究の概要

(1) 学科等の特色を生かしたカリキュラム開発の重点目標

農業経営科で培ってきた地域資源を生かした地域の課題解決に向けた専門性の高い課題研究について，作成している「世羅高生に付けたい資質・能力」への到達を測るルーブリックが作成され，生徒の学習状況を適切に評価することができる。また，そのルーブリックによる評価が学校のすべての学習と活動に汎用的に活用される形式に落とし込まれる。３学科併設の利点を生かし，３学科が協働できる教育課程の実現をはかる。

(2) ３年後の目指す学校の姿

専門学科が取り組んできた，地域資源を生かした地域の課題解決に向けた専門性の高い課題研究の成果と，普通科の広範な学習の成果を互いに享受し協働することで，世羅高校から地域への発信力を高めていく。また，すべての生徒が，世羅を自らのフィールドとして活動することで，将来的に世羅を思い，世羅の未来を創ろうとする，地域社会のあらゆる分野においてリーダーとなれる生徒が育成される。

(3) 令和３年度の目標

ア　アウトプット（活動指標）

・学校として育成を目指す資質・能力についてのルーブリックを，教員による評価及び生徒自身による自己評価に活用し，生徒の学習状況を適切に評価することができている。

・農業経営科の課題研究の評価について，「世羅高生に付けたい資質・能力」を測るルーブリックが作成され，生徒の学習状況を適切に評価することができている。

イ　アウトカム（成果目標）

・授業評価アンケートの「授業で学んだ内容を地域・社会の諸事象とつなげて考えることができた」が最高評価４の生徒の割合が，70%以上になっている。

・世羅高生に付けたい資質・能力の自己評価レベルが，学年末に上がった生徒の割合が 50%以上になっている。

(4) 令和３年度のカリキュラム開発の内容及び校内体制

ア　カリキュラムの核とする教科・科目等名

・農業経営科　課題研究　（普通科　総合的な探究の時間）

イ　カリキュラム開発の概要

（マクロレベル）カリキュラム開発に先んじて，それまで設定していた学校全体の「育成を目指す資質・能力」の検証を行った。また，育成を目指す資質・能力を，いつまでに，どの程度育成するのかを明確化し，各教科で作成するもののスケールをそろえるとともに，その共通理解を促すために，全教員の意見を反映させながらマスタールーブリックを作成した。

具体的には，４月にそれまでの「世羅高生に付けたい資質・能力」の到達度を生徒に自己評価させ，学年間の相関や，生徒への浸透度を測り，客観的に評価する取組を行った。その反省とともに，８月に校内教員研修を実施し，その後，マスタールーブリックの作成に向けての研修を校内で共有し，教科主任会議で意見集約を図りながら，全教員で新たな「世羅高生に付けたい資質・能力」をマスタールーブリックとして作成した。

（ミクロレベル）育てたい生徒像を，「世羅を思い，世羅の未来を創ろうとする生徒」としている学校として，世羅を舞台として課題を発見し，それを解決する活動を主体的に行う授業によって，生徒の自主性・自律性を高め，リーダー性を育む取組を進めてきた農業経営科の課題研究を中心に，カリキュラム開発を行った。農業経営科は，地域の農業法人などとの連携も歴史があり，その課題研究の取組を他の２学科で共有できるようにするために，カリキュラム開発を行った。

具体的には，地域の六次産業ネットワーク等の外部組織と連携し，実際の商業活動に結び付けていく活動を行うことをとおして，自らの研究を再考察させた。再考察は，他者の評価から学んだり，他者の内容に対して具体的なアドバイスをしたりして，試行錯誤することにより，より良いものを生み出す態度と姿勢を育成することを目的とした。これに対して，「生徒の評価する活動」を評価することを目的とする教員研修を実施し，教科基準の妥当性や公平性について課題を確認した。

ウ　校内体制

カリキュラム開発を全教職員が参画して行うために，管理職に加え，各学科主任と総合的な探究の時間の担当者による実行委員会をとおして，各教科会議との連携を密にする計画であったが，２学期以降は，実行委員会に加え，以前から校内に組織されていた教科主任会議を通じて，カリキュラム開発にかかわる教科からの意見のとりまとめや研修のまとめの共有を行った。また，例年計画されている授業改善のための年４回の校内授業研究のテーマに新しいカリキュラムにかかわる内容を加え，実施した。

(5) 学習評価

定期考査で知識・技能を広く活用しながら解く「活用問題」を導入し，付けたい資質・能力の定着の状況をはかるようにしている。実施後，正答率，解答の傾向などから，各教科の取組の成果と課題を明確に整理するこ

とができた。

１学期末に行う第１回授業評価アンケートによる生徒の自己の学習状況及び授業への評価から，教科ごとに改善に取り組む課題を明らかにし，学習や指導の改善に取り組んだ。その結果を，第２回授業評価アンケートで検証し，次年度に向けての教科の課題と次年度の教科ごとの「世羅高生に付けたい資質・能力」の内容を見直す資料としている。

民間テストについて

受験前指導等：実施１か月前に保護者宛て案内を配付
受験クラス担任の研修（説明動画視聴含む）
受験内容・趣旨説明（受験準備ガイド活用）

受験後指導等：思考力トレーニングBOOK理解編への取組（受験直後）
思考力トレーニングBOOK活用編への取組（結果返却時から春休み課題）

結果検討会：３月３日14：00～
ＧＰＳ-Academic の結果と来年度に向けて作成したマスタールーブリックを使った個別生徒への評価を検証し，マスタールーブリックのレベル分けの妥当性，各レベルの定義の明確化と教員間での共有などの状況を整理し，改善に向けての助言を受ける。

今後の活用：学校（学年）の思考の強みと弱みを把握し，特に弱みであった批判的思考力を伸長するための指導を共有していく。
ＧＰＳ-Academicによる思考力と教科学力のバランスを活用し,注目すべき生徒について,世羅高校が各教科で付けたい資質・能力の育成状況を継続して確認する。（アンケート調査）

(6) カリキュラム評価

（マクロレベル）４月当初の付けたい資質・能力のアンケートの結果から，資質・能力を測ることのできるルーブリックになっていないことが明らかとなった。全面的なブラッシュアップが急務であったが，マスタールーブリックの作成作業に向けて，研修内容の共有とその作業の中で，各教科の付けたい資質・能力の再考に向けて整理した。各教科で整理した内容を 10 月に実行委員会・教科主任会議で検討し，来年度のマスタールーブリックを確定した。また年度始めに，学校評価において活用する指標として「この授業で，授業で学んだ内容を地域・社会の諸事象とつなげて考えることができた生徒の割合」を加え，明確に「できた」とする生徒の割合を把握するために，肯定的評価の割合ではなく最高評価の割合を活用し，70%の達成を年度の 12 月までに達成することにした。

（ミクロレベル）授業評価アンケートの結果をみると，農業経営科の数値が高く，且つ，学年進行で評価が上がる傾向にある。農業経営科のカリキュラムを活用することに意味があると判断した。そのカリキュラムを共有するための授業研究を取り入れた。

３　令和３年度の成果及び課題

(1) 成果

第１回授業評価アンケートの結果を分析したところ，育てたい生徒像にもっとも係る指標である「この授業で，学んだことを地域・社会のことにつなげて考えることができた」の項目で，最高評価をつける生徒の割合が，普通科 58.6%，生活福祉科 57.9%，農業経営科 73.2%であった。これは，農業経営科のカリキュラムが最も地域・社会とのつながりをもつ形になり，生徒たちがそれを意識できるものになっていると評価できる。そこで農業経営科のカリキュラムを他学科に落とし込み，その取組を共有することの意味が大きいと再確認できたため農業経営科の特に生徒が主体的に活動し，地域の課題と向き合っている課題研究の授業で，カリキュラム開発を行い全教員で授業研究を行った。

・授業研究での生徒の評価について

授業は，地域の農業や自然，地域農業や農山村の特色・文化等を理解するとともに，地域資源の探求と活用に関する基礎的・基本的な知識を身に付け活用させる内容を行った。研究したことを文章や写真，グラフを用いて適切にまとめ提案することを身に付けさせるために，その材料となるよう個々で「災害備蓄食品プロジェクトのレシピ考案」について課題に取り組ませた。地域農産物を使用すること，原材料費 300 円以内，カロリ

一計算 600 ㎉以上，栄養バランス，災害時の食事として適しているか等を調べて，実際に製造した上で，官能検査を行い，原稿，発表スライドを作成させた。生徒同士でそれぞれの作品を多面的に評価し，具体的な改善策を提案させた。他者の評価から学んだり，他者の内容に対して具体的なアドバイスをしたり，試行錯誤することにより，より良いものを生み出す態度と姿勢を身に付けられるように行った。

授業に参加した農業経営科３年課題研究地域活性化班６名は，実習や実験には意欲的で真面目に取り組むが，資料の作成については苦手で、発表など人前で話すことも苦手とする生徒である。また，他者に対しての意見も遠慮してできない傾向が見受けられる。アンケートの結果でも「資料の作成」については６名中５名が苦手であると答えている。「発表が苦手である」という問いに対しても，６名中４名が「苦手」だと答えている。また，「意見を発言する」ことに対しても６名中５名は「苦手」だと答えている。この授業に参加した生徒が，この課題研究を通じてどのように変化したかを検証した。

本時の評価基準

A：期待する活動が十分見られる	他者の課題の取り組み内容について，改善に向け，肯定的な表現を用いて具体的に評価することにより，多面的に捉えて，具体的で適切な表現をすることができる。
B：期待する活動が，未到達な部分もある	他者の課題の取り組み内容について，改善に向け，肯定的な表現を用いて具体的に評価することにより，改善点を表現することができる。
C：期待する活動が見られない	他者の課題の取り組み内容について，具体的に評価することはできるが，改善に向けた表現をすることができない。

６名の生徒それぞれの活動の様子を観察し，「A：期待する活動が十分見られる」に評価した。本時間で発表した生徒は４名であったが，自分の発表以外の生徒は，手元にある評価用のプリントへ疑問点や改善策を記入し，６人全員が積極的に考え，表現する姿を見ることができた。

改善に向け肯定的な表現を用いることにより，多面的に捉えて具体的で適切な表現をすることができた例を挙げると，今回の災害時用の備蓄食品レシピ作成課題について特に食物アレルギーを考慮するようには指示していなかったが，改善点として卵アレルギーの人もいることから，卵を使用している場合の対策に代用として長芋を活用する方法を提案したり，また，色味の少ないレシピには野菜で彩を増やすことで災害時に少しでも食べ物で元気になってほしいという提案があった。野菜を少量増やすだけならば栄養的にも原材料価格の上昇も抑えられるので見た目がより良くなると考えての提案である。

実際に災害時の備蓄食品を配給された経験がない生徒だったが，災害時という場面を想像し，何をすれば苦しい思いをしている人たちに寄り添い，より良い生活環境を生み出せるのかということを真剣に考え取り組んでいることが見える授業であった。

人前で話すことも他の生徒に意見を言うことも苦手である生徒であったが，課題研究の授業を取り組む中で，少しずつ「できる」ことが増えていく様子を見ることができた。特に本時では多くの教員の前で発表するということもあり，特にその姿に成長が顕著に表れていた。課題研究授業の「学びが地域・社会につなげて考えることができる生徒の育成」につながるとともに進路の選択の幅を広げる一助となっていると考える。実際に１名の生徒がこの課題研究の内容を国立大学推薦入試の志望理由書や面接で活かし，合格につなげた。

課題研究の授業で検証の対象となった農業経営科の６名の生徒と，第３学年全体，第３学年農業経営科全体との授業評価アンケートの項目ごとの比較は次の通りである。課題研究で成長を見取ることができた生徒は，学年や学科全体と比べ自己評価がかなり高い。また，他の生徒が高い評価をしていない項目５（思考を地域につなげるもの）で高いだけでなく，項目４（思考全体に係るもの）も高い評価をしていることがわかる。このことから，専門学科の課題研究や普通科の総合的な探究の時間での主体的な学びが，学びの質全体を上昇させ，生徒にとっての自己評価を高めるという結果につながるといえる。

	項目３	項目４	項目５	項目６
項目の内容（文章）	私はこの授業で，自分を取り巻く事象に対して，興味関心を高めることができた	私はこの授業で，自ら思考したり，考えを発表したり，他者の考えを共有したりすることができた	私はこの授業で，授業で学んだ内容を地域・社会の諸事象とつなげて考えることができた	私はこの授業で，授業で学んだ内容を自らの進路につなげることができた
課題研究６名	93.1%	94.4%	93.1%	91.7%
第３学年農業経営科	80.8%	78.4%	78.1%	76.1%
第３学年全体	79.2%	77.9%	73.8%	77.1%

(2) 課題

第１回授業評価アンケートの結果では学校全体で「この授業で学んだ内容を地域・社会の諸事象とつなげて考えることができた」の最高評価の生徒の割合が70%となることを目標としたが，62.5%であった。全体として目標の70%に届かなかったことを意識して，第２学期以降の課題研究や総合的な探究の時間の内容に取り組み，それ以外の授業も，生徒たちの身近な事象への関連や影響をできるだけ意識できるような問の設定や，活用問題を工夫した。第２回目のアンケートでこの指標は全体で 67.0%であった。最高評価４の生徒の割合は増加したものの，目標に到達しなかった点は今後も取組を進めていく必要がある。また，授業評価アンケートは全部で６つの指標があり，そのうちの４項目が授業でどのような力がついたかに係る内容である。その４項目のなかで最も数値が低いのが，「この授業で学んだ内容を地域・社会の諸事象とつなげて考えることができた」の項目であった。農業経営科と比べ，他の２学科では地域との関わりを意識したり，思考を地域につなげたりする機会が多くないと考えられる。

4　令和４年度の目標及び取組内容

(1) 令和４年度の目標

ア　アウトプット（活動指標）

・農業経営科の課題研究の評価指標が総合的な探究の時間や生活福祉科の課題研究においても共有されている。
・マスタールーブリックを活用して，教員による評価及び生徒自身による自己評価が行われ，生徒の学習状況を評価することに，教科の付けたい資質・能力のルーブリックが活用され，適切に評価されている。
・民間テストで測った生徒の資質・能力と，教科の付けたい資質・能力に対しての到達状況の自己評価との相関関係について継続して分析し，関連から教科の付けたい資質・能力の内容やその到達状況を判断するための作問を工夫する。

イ　アウトカム（成果目標）

・マスタールーブリックを活用したアンケートで，到達レベルが４月時点から学年末までに上がった生徒の割合が70%以上となる。
・授業評価アンケートで，「この授業で学んだ内容を地域・社会の諸事象とつなげて考えることができた」の最高評価の生徒の割合が70%となる。
・専門学科の課題研究，普通科の総合的な探究の時間において，育てたい生徒像に係る項目（項目３～項目５）で最高評価が70%以上になっている。

項目３　私はこの授業で，自分を取り巻く事象に対して，興味関心を高めることができた。
項目４　私はこの授業で，自ら思考したり，考えを発表したり，他者の考えを共有したりすることができた。
項目５　私は授業で学んだ内容を地域・社会の諸事象とつなげて考えることができた。

(2) 令和４年度のカリキュラム開発の内容及び校内体制

ア　カリキュラム開発の概要

・農業経営科の課題研究の評価指標のマニュアル化と総合的な探究の時間の評価指標を整理し，互いの評価に整合性を図る。

・農業経営科の課題研究と普通科の総合的な探究の時間の授業内容の共有への取組を進める。
・次年度に向けて，教育課程運用上の課題の整理と解決に向けて取組む。

イ　校内体制
・教科主任会議で報告，検討する内容を明示し，それを各教科会議において協議する。その協議した内容を次の教科主任会で報告する形式を継続する。また，各教科会から出された課題を研修の内容やテーマに活かし，カリキュラム開発を進める。
・課題研究・総合的な探究の時間運営委員会（仮）を発足させ，農業経営科の課題研究と普通科の総合的な探究の時間の授業内容の共有への取組を進め，教育課程運用上の課題の整理と解決に向けて具体的な案を提案する。